

## 第2次大戦後のユダヤ系アメリカ人の相貌

——40, 50年代のユダヤ系文学 (1)——

稲 田 武 彦

### The Aspects of Jewish Americans in Their Fiction of the 1940s and 1950s (1)

Takehiko Inada

#### はじめに

アメリカ・ユダヤ系文学は1920年代および30年代の移民定着後の伸長期を踏まえ、第2次大戦後いよいよその開花期を迎えるわけだが、ここでは最盛期の60年代へむけてユダヤ系作家が注目され出した、いわゆる戦後（戦中も含む）の40, 50年代を中心に考察をおこなう。

この時期の外的衝撃としては、まずアメリカ自らがかかわった大戦を通してとどめることのできなかったナチスによる Holocaust (大虐殺) があり、次いでそれによって促進された一つの帰結 といえ、米・ソ二大国の世界戦略も絡まったなかで生まれ、いままアラブ民族主義と抗争の続くイスラエルの建国 (1948) を目にしている。これらはいずれもユダヤ系アメリカ人に限っての問題でなく、人間としてまた全世界的な視野で、苦く厳しい検討を迫られるものだが、とりわけユダヤ人、特に戦後最大の居住地となったアメリカの彼らにとって、その存在の根に激しく深くつきささる衝撃だったといえるだろう。Jewishness への志向で acculturation は鈍り、同化で衰退していた若い世代も一時盛り返すほどだった。作品に被迫害の記憶やユダヤ人の国での体験がストレートに出されていなくとも、anti-Semitism (反ユダヤ主義) や Zionism からくる意識あるいは雰囲気はこの時期にとどまらず、60年代以降もながく尾を引いていく。

identity にたいするこのようないわば外的な触発と併行して、それにさまざまな対応をみせながら、彼らはたえず脱ユダヤ性による内的触発も受けていく。移民当初からの Judaism (伝統) と Americanization (同化) の拮抗の問題である。アメリカ生まれの2世もいまや戦争に参加し、あるいは高等教育を終えて戦後の世界へ出てい

き、育ちいく3世も交えて世代は交代へむけて始動する。すでに社会・経済的地位の向上をはかりつつあった東欧系ユダヤ移民は、戦後の好況のなかで中産階級入りをはたし、アメリカ社会、殊に大都市およびその周辺地域における生活様式の変化に異教徒とともに自らも参画する。さらに、intermarriage（異種族もしくは異教徒間結婚）によってますます Judaism から遠ざかっていく。東欧のユダヤ人世界は崩壊し、新生イスラエルは必ずしも帰るべき homeland ではない、アメリカこそ生まれ育った土地なのだ。だが、世俗化した生活のなかにも Judaism の痕跡は残り、失われる identity の触発する帰属意識の微妙な揺れもつきまとう。そのようなユダヤ人像が画一化、疎外化を深めていく戦後大衆社会のなかで象徴めき、ユダヤ系文学作品の内容の複層化あるいは普遍化にもつながる。

本稿では、主として以上の諸点にたいするこの時期のユダヤ系アメリカ人のかかわり方を背景(A)とし、(B)でその(1)、(2)に関連する彼らの小説をとりあげ (3)の作品については次の機会)、ユダヤ人像が創造的な変容を遂げる60年代までの過程を探ってみたい。

## (A)

### (1) Holocaust の衝撃と anti-Semitism

ナチスによるホロコーストは、近代西欧におけるユダヤ人解放後も底流としてあった根強いユダヤ排斥思想を背景に、人種の優劣と純粋性を説く似而非人種科学をドイツ・ナショナリズムに結びつけ、折からヴェルサイユ条約体制によって経済的苦境に立たされた中間層の不満を吸収したヒトラーのデマゴーグと独裁権力がもたらしたものといえるだろう。全体の犠牲者数は1,200万、うちユダヤ人が500万とされている（一説に600万あるいは450万ともいわれるが、いずれにせよある評者のいうように、それで罪の重さが変わるはずもない）。1933年のナチスによる政権奪取後、最初はユダヤ人商店にたいするボイコットや略奪、ユダヤ人への個別的暴行などから始まり、次いで公職からの追放、ユダヤ人市民権の法的剥奪を意図したニュルンベルク法制定（1935）、ユダヤ青年によるドイツ外交官襲撃の報復に名を借りたクリスタル・ナハト（水晶の夜）のポグロム（1938）を経て社会・経済活動は殆ど停止させられる。この間代償を払うことによってイスラエルなど海外移住も認められていたが、開戦前後には大量逮捕による強制収容所あるいは特設ゲットーへの収容で病氣と飢にさらされ、また異教徒と一緒に銃口の前に立たされた。そしてついにヒトラーのいわゆる“Final

Solution”（最終的解決）の段階を迎えるが、1942年1月のヴァンゼー会議で具体的計画が決まると併行して死の収容所設置などの作業、調整がおこなわれ、3月以降ドイツ占領下のヨーロッパ各地から移送されてきたユダヤ人のチクロンBによる大量虐殺が本格化する。選別で即決の死を免れても重労働に酷使され、結局死への道を辿る者も多く、1944年秋中止命令が出されたものの、ドイツ軍敗走に伴う無益な撤収作業のなかで解放を目前に伝染病や飢でさらに何万もの犠牲者が出た。

このような大量殺戮を招いた原因として、ヒトラーの絶対命令の下ナチスの人を物として扱う非道冷酷さというまでもないが、デンマーク、フィンランドなど少数の例外を除けば、程度の差はあれヨーロッパ各地（特に東欧）での反ユダヤ主義・感情が占領下とはいえ蛮行を助けたのを見逃すことはできない。これにはナチスと政教協定<sup>コンコルド</sup>を結んだ（1933）ヴァチカンの消極的姿勢も含まれよう。また連合国側でも、事前の段階で移民制限を強化（アメリカ、フランス等）したり、米大統領提唱によるスイスでのユダヤ難民問題の会議（1938）を不調に終らせるなどして対応を遅らせ、最終的解決の実行が本格化してまもない1942年の夏までには、ナチスの特殊部隊 SS についての資料や大量虐殺の報告に接しながら想像外のこととして信ぜず、アメリカの諜報機関がドイツから直接確認する情報を得て（1943年頭初）はじめて認める仕末で、この暴虐を阻止する有効な手だてを見い出せなかった。結局、連合軍兵士の目による現場の惨状確認と戦犯裁判の過程での実態解明を通して、人類史上最大といえる罪が全世界の前に明らかになるのである（体験記録や視覚的資料というまでもない）。

一方これほどの犠牲を強いられたユダヤ人自身の対応は、結果的には無抵抗に近かったといわざるを得ない。当初最終的解決はあくまで秘密にされていたし、その考え自体、だれよりも同化意識の強かったドイツのユダヤ人にとって予想もされないことだった。ナチスが実行にあたってことを効率よく運ぶため、移送を再入植、ガス室はシャワー室などとカモフラージュしたことも手伝い、彼らは死のキャンプの噂をなかなか信じようとしなかった。始めはなんとか共同体の団結を維持し、非暴力抵抗で迫害の軽減をはかり、いろいろな組織を通して存続をめざしたが、ナチスの過小評価や非現実的楽観論を捨てきれず、絶滅期に臨んでは個人的不服従（自殺も含む）、買収による犠牲規模の縮小などといった散発的手段しかとれなかった。なるほど相手の巧妙さや残忍さ、圧倒的な火力、ユダヤ人警察などの身内の裏切りに大量報復を恐れ、パニックを避けたいとする配慮もあっただろうが、最終段階に至ってもはや効果的抵抗はできなかったのだ。また、たとえ意図に気づいたにせよ、理解を絶した虐殺のため、人々は心と感覚を麻痺させていたともいえる。実際問題として、絶えざる移動で

共同体や組織は破壊され、指導者たちも死んでいた。連合国側の支援も手遅れで、その意味ではかろうじて生き残った者も含めて悔恨と恥辱がつきまとうのは否めない。そのなかにあって一つの救いであり、彼らの面目を施す抵抗が1943年4月から一カ月にわたるワルシャワ・ゲットーでの蜂起だった。貧弱な武器で重砲火と戦車に果敢に立ち向かった結果は玉碎に終わったが、まさに B. Hect のいうごとく “the little souvenir of Jewish pride that glinted in Europe's garbage can” であり、悲惨のなかにきらりと光る一片の尊い人間的意志の証であろう。このほかその地域のバルチザンに身を投じた者、逆に個人的好意から危険をおかしてユダヤ人を匿った異教徒の住民がいたことも、それぞれの名誉のためにいっておかなければならない。

以上のような経緯にたいし、アメリカおよびそのユダヤ系市民はどう反応したか。のちに対日につづいて対独開戦に踏み切り連合側の一員とはなるが、元来孤立主義の伝統のあるアメリカはどちらかといえばナチスのユダヤ人迫害にも無関心で、懸念を募らせるユダヤ系にたいして、そこに Jewish interests のにおいを嗅ぎつけ、アメリカを対独戦に巻き込むと警告する者 (Lindbergh など) もいた。これにはまた、1929年の恐慌とともに忍び込んだナチスのドイツ系アメリカ人による anti-Semitism の影響があり、さらに当時頻発した労使紛争を背景に、ユダヤ人を虐待する Nazism より Communism への恐怖が先行し、革命家としてのユダヤ人のイメージもまたいついてくる。このなかで F. D. Roosevelt は体制内の刷新政策といわれる New Deal により不況の克服にあたっていた。その対応に追われたことにもよるだろうが、ユダヤ系がニューディールを通じ圧倒的支持をあたえたローズヴェルトも亡命者には同情的であったにせよナチスには慎重で、その対ユダヤ人政策を公然と批判するのをためらい、ユダヤ人の権利回復要求決議案が國務省の手で葬られるのに任せた。この姿勢は絶滅の過程が始まって変わらず、死のキャンプの大統領宛実状報告もそのままにされたといわれる。移民法改正や難民対策にしても、前述のようにこれはなにもアメリカに限ったことではないが、民主主義陣営のリーダーの自負からいって問題を残したといえよう。大戦直前およびそのさなかにユダヤ系は移民制限法の手直しを求めたが、雇用事情にたいする世論の厳しさへの配慮や、スパイ防止を口実に政府はこれに応ぜず、割当数引上げや例外も認められなかった。むしろ外人受け入れ取締りにつながるスミス法 (1940)、ヴィザ発行制限のラッセル法 (1941) と強化があいつぎ、戦前には科学者、学者、作家など専門職を中心とした15万ほどの亡命者を受け入れているに過ぎない。“絶滅作業”の進行している1943年バーミュダで開かれた米・英共催の難民対策会議でさえ、自己利益優先に終始する有様だった。亡命者の安全な逃げ場



とみられたパレスチナも、アラブ対策上イギリスによって厳しい入植制限がひかれ(1939年白書による)、この事情を考慮したローズヴェルトは現状凍結に傾き、結局ここでもユダヤ人の救出に有効な手を打つに至らなかった。1944年ようやく War Refugee Board が設置されたものの、ハンガリーの犠牲者を一部救うことができたにとどまる。このように不況時の国内問題を抱えて、総体的にユダヤ問題には積極的でなかったアメリカだが、クリスタル・ナハト事件をきっかけに同情の声もおこり、反ユダヤ感情は一掃されないまでも、ドイツからの離反の空気が出てきた。やがて、決っていた第2次大戦への全面的参戦で軍需景気が到来し、ニューディールもカバーできなかった雇用事情は好転、戦況も有利となってスケープ・ゴートの反ユダヤ感情は鎮静化したが、その参戦はナチスのユダヤ人絶滅を加速させたともいわれるだけに、ユダヤ系にとっては複雑な思いを抱かせられるところだろう。

いわば四面楚歌的な状況のなかで、アメリカのユダヤ系市民がとった態度、受けた衝撃はどうだったか。不幸なことに、ヨーロッパのユダヤ人への危機到来に際して、アメリカ国内のユダヤ系の階層的内部分裂が却って露呈されることになった。その根には改革、保守、正統各派の軋轢、文化的背景の違い(西欧系と東欧系)などがあり、さらにこの時期パレスチナでますます緊迫してきたシオニズムの動きが混乱に輪をかけた。シオニストの力の成長は同化志向の西欧系(uptown の改良派でもある)の反撥だけでなく、downtown の社会主義者(東欧系)との抗争も生み出した。限定的統一体である American Jewish Conference をつくった(1943)ものの不安定で、パレスチナ建国決議をめぐる American Jewish Committee (西欧系)が脱退する一幕もあった。このような状況でホロコーストに全面的対処をなし得ず(もっともこれは当のヨーロッパのユダヤ人でさえ半信半疑だったことを思えば無理もないかもしれぬが)、政府にも直接強力な圧力をかけられず、結果としてユダヤ人救済に反対する勢力に益することとなった。ドイツでのユダヤ人商店のボイコットに対抗し、それなりに成果のあったとされるドイツ製品のボイコットも、ヨーロッパのユダヤ人と関係のある正統派ないしシオニストの手でまずおこなわれ、それをあまりにも感情的と考えた American Jewish Committee は政府を通し外交交渉でのユダヤ人救出に傾いた。後者はボイコットが余計に欧ユダヤ人の立場を悪くし、30年代に高まった anti-Semitism を助長すると考え(げんにナチスはこれをふたたび逆手にとった)、*The Lost Tribe* で Hect が嘆いたように、ユダヤ人のための戦争ととられぬよう消極的になり、一方非同化の者は嘆きと祈りに閉じこもった。ただ、伝統的ゼダカの精神に基づき救援基金を設けて被迫害者、亡命者の救済にはあたった。要するに

彼らもまたナチスの力を過小評価し、父祖たちの祖国ドイツへの信頼を裏切られたわけである。死のキャンプの実態が明らかになると、その衝撃はとりわけ西欧系に強かった。ナチスにとってユダヤ人はだれでもユダヤ人であり、文化的同化の度合いは彼の運命を左右する決め手にならなかったということである。その反省に立って西欧系と東欧系の抗争にも一応の終止符が打たれ、Jewishness への関心と Jewish Homeland の必要性があらためて強調されることになった。アメリカ・ユダヤ系文学の場合、生き残りの移民でもない限り直接ホロコーストについて訴えるケースはないわけだが、体験者でなくとも神の存在への疑問や、犠牲者を救えなかった罪意識、ナチスの糾弾をそのテーマとすることはできるし、見聞を基にして忌まわしい体験を持った人物を登場させ、彼らがつきまとう悪夢を抜き難い体内のトゲのように抱えて生きる小説はむしろ時をおいてこの期のあとに多い。

さすがに戦後反ユダヤ主義・感情は目に見えてなくなる、ホロコーストの結果それにとたいする意識的抑止が生じたからであろう。特異な例外は黒人暴動の際のユダヤ人商店の略奪と黒人過激派による anti-Semitism の言辞だが、略奪のはしりは戦中の1942年 Harlem でみられたものの、ユダヤ人が商店主あるいは家主として直接黒人とかかわっている事情を考えれば、彼らが白人憎悪の象徴とされるのも無理はない。たしかに白人対黒人というアメリカの社会慣習、階層差、恐れなどでユダヤ系側が反感を持っているともいえるが、反面被害者という共通点から1940年代より法的・社会的活動を通して黒人の地位向上に協力し、公民権問題と早くから取り組んできたのもユダヤ系の組織だった。この両者のあいだには微妙で ambivalent な心理がはたらいっているといえよう。この例はさて置いて、当然ユダヤ系自身にとってもホロコーストの影響は大きく、それは彼らの感受性の試金石であり、早期警報装置ともいうべき危機感覚を発達させることになった。これを単に group paranoia と片付けるには20世紀の彼らの経験はあまりにも重い。防衛諸機関(たとえば Anti-Defamation League など)は社会・経済的差別の形での敵意、反感にも積極的姿勢をとり、入学定員割当改悪撤廃(コロンビア大—1949)、公正雇用施行令(ニューヨーク州議会—1948)を勝ちとった。50年代の McCarthyism の反動的反共ヒステリーは必ずしも反ユダヤ主義ということではなかったが、市民の自由を奪うことがユダヤ人の迫害につながるのを知り、一般国民以上に危惧した(ただし、移民当時から急進主義は稀薄になったが)。その他、ソ連におけるユダヤ人の処遇の重視、西独や米国内でのナチス復活への警戒を怠らない。その一段と強まった liberalism は冷戦期にも彼らを冷静に保たせ、大統領選をはじめ各種選挙で一定の力を示した。彼らは世論形成の上でもしばしば指導

的役割をはたしてきており、ごく最近の例でいうと、祖国ともいべきイスラエルのレバノン侵攻(1982)をめぐり、D. Bell や S. Bellow ら知名人がその拡張政策を非難したり、なかには献金を断わる者も出ている。これはすでに60年代のヴェトナム反戦時にもうかがえたことで、中核となった大学の radicals の50~75%がユダヤ系出身であり、武力一辺倒のイスラエルへの疑問も出されていた。

以上をポグロムやホロコーストを頂点とする反ユダヤ主義があたえた影響の外面的あらわれとするなら、その内面的なものとしては、反ユダヤ感情を持つと思われる異教徒の意識への過度な注意、警戒があげられるだろう。疎隔感が基底にあったことだが、できるだけ人目につかぬよう、仲間の罪はなるべく隠し(これがしばしば P. Roth のような作家とユダヤ系共同体のあいだの争点になるが)、むしろ異教徒の望むイメージづくりにまで進む。あるいは例のユダヤ人の自己嫌悪 (Jüdischer Selbsthass) というやつで、ユダヤ人らしさへの過敏症からくる劣等感にさいなまれ、かと思えば反転して、自分たちだけの世界に孤立し(クラブ、学校、ホテルなど専用のものを持つ)、ひそかに優越感にひたる傾向もないわけではない。文学作品としてはこの辺の心理のメカニズムが題材的興味をひき、多彩なバリエーションを描いてみせてくれる。ついでにいえば、3世くらいの世代では前の世代にくらべこのような心理のゆがみは少なく、それだけ却って反ユダヤ的感情の突出に会おうと傷つき易い面があるという。

## (2) イスラエル建国とシオンのアメリカ

近代シオニズムの理念の発生と国際シオニズム運動の経緯については、前稿(本学「研究論叢」:第19号)で概略を述べておいたので、ここでは主としてイスラエル実現(1948)の前後にあたるこの時期を、アメリカのユダヤ系社会およびそのシオニズム運動との関連でみておくことにする。アウシュヴィッツのガス室からイスラエルが誕生したといわれるように、ナチスの虐殺でユダヤ人意識が触発され、ユダヤ人全体に連帯感が生じた。世界中のユダヤ人を宗教と民族の絆で結び、その誇りの中心たらしめる民族郷土建設のトーンは、戦後熾烈化した対英、対アラブ闘争のなかで一段と高まった。欧米の大戦中の態度からくるユダヤ人への罪意識や同情もあるが、たとえその理念を信じなくとも避難場所としてのパレスチナの実用価値を彼らが認識し、黙認するのを国際シオニストたちは期待しかつ利用した。このような動きはアメリカのユダヤ系社会にも反映し、戦時中結成されたユダヤ教協議会のようにアメリカのユダヤ人はユダヤ人国家になんの義務もないとする反シオニスト組織も、強制収容所の恐怖

が暴露され、生存者がパレスチナへ続々帰還をめざすのを目にするとその支持を失った。西欧のユダヤ人のようにアメリカの同化的西欧系ユダヤ人もヒトラー・ショックで兄弟意識に目ざめ、二重忠誠の問題は殆どきかれなくなる。一方シオニズムを反動的ブルジョアジーの民族主義として反対していた社会主義者たちも、スターリニストの反ユダヤ主義などに水をさされた。まさにホロコーストは、それまでできなかった American Jewry の Zionization を成し遂げたといえるわけだ。事実1945年の時点でユダヤ国家設立賛成者は60%だったという。シオニスト機関その他ユダヤ系の各種組織はパレスチナにおける建国運動のための資金集めを精力的におこない、建国後も寄付や公債購入を通して財政援助を続けている。

これより先アメリカのシオニズム運動は、右から左までさまざまな派を抱えながら20年代初頭までは穏健派の有力な指導者 L. Brandeis を得て、加入者、資金面で飛躍を遂げ、現地への援助も充実し、パリ和平交渉へ代表を派遣するなどして国際的運動の推進にあたった。ウィルソン大統領がバルフォア宣言を承認したのもブランダイスの説得によるという。やがてブランダイス派が追われると、アメリカでの運動は世界シオニスト運動のサービス機関の一つとなって衰退し、反シオニズムの動きも加わって亀裂がひろまった。この間創始者 Herzl の死後国際運動をリードしたいいわゆる "Practical Zionism" の C. Weizman から東欧系推進者が、強い文化的再生の理念を胸にして、バルフォア宣言を楯にパレスチナで着実な基盤づくりに取り組んでいた。入植者数も第1次大戦直後に56,000（全人口比10%弱）だったのが、第2次大戦後ではナチスの迫害による移民を含めて60万（同35%）に達した。折から対アラブ政策上バルフォア宣言の否定ともいえる1939年白書で厳しい入植制限を課したイギリスと敵対していたこともあり、彼らはアメリカ参戦によるその国際政治への影響力を考えて、アメリカへの働きかけを強化するようになる。これまで反ユダヤ主義を刺激しないようにと慎重を期してきたシオニストたちが、はじめて公式に国家樹立計画を宣言したのがビルトモア綱領（アメリカ・シオニストの臨時大会—1942）であり、これが世界シオニスト運動での公式のものとなった背景には、ワイツマンを引き継いだ国家主義シオニスト Ben-Gurion とアメリカ側シオニストとの結束がある。ホロコースト後いやでも世界最大のユダヤ人センターとなったアメリカ・ユダヤ系社会の世界シオニスト運動における比重は高まり、他方国際交渉の場はイギリスの委任統治のあとを受けた国連に移った。結局、パレスチナ分割案が冷戦期に臨む米・ソ二大国の中東政策の思惑も重なって採択され（1947）、翌年5月の建国宣言を迎える。トルーマン大統領は建国案に冷淡といわれた前任者ローズヴェルトと違いただちにこれを承認

(ソ連は二日後)、アラブ諸国は翌日銃火をもってこれに応じた(第1次中東戦争)が、イスラエル優勢のうちに休戦協定(1949)、同年その国連加盟でひとまず結着をみる。ポグロムで芽生えたシオニズムの理念はホロコーストを経てここに実現したものの、あらたに難民問題も含めて民族主義間の抗争の火種を抱えることになった。

このようにほう大な犠牲の血と入植の汗とで築きあげた祖国イスラエルのおよぼした精神的影響は、ユダヤ人全体にとって大きかったのは当然であろう。ウィーン生まれの作家・批評家で強制収容所体験のある J. Améry はその書簡(1967)で、「……イスラエルは新しいユダヤ人像を生み出した。……反ユダヤ主義者によって自分の姿を定めさせる必要がなくなった。イスラエルの存在は、イスラエルともユダヤ教ともユダヤ文化とも関係をもたないユダヤ人にも、みずからを尊重する習慣を回復させた」と自立を支える identity の根としてのイスラエルの存在を強調している。アメリカのユダヤ人もイスラエル建国で(精神的)出身国を持つことになり、不安感は拭われ、異教徒のなかでの立場と自信が改良されるとし、イスラエルを自分の身代わりの延長とみて、ホロコーストの直後だけに、ナチス戦犯の追求やアラブと闘うユダヤ人の姿に従来のイメージを破るものを認めた。さらに、イスラエルの存続をユダヤの共同体のその核とみるシンボリックな見方も出てくる。

ところが、そのような祖国への帰属と国づくりのため、「すべてのユダヤ人がイスラエルに住む権利あり」と定めた帰還法の制定(1950)に伴い世界各地から帰還をはたす者が続いたというのに、なぜかイスラエルに移住の要請を感じるユダヤ系アメリカ人は少ないという。その少ない移民も結局生活が合わずに帰ってきたり、居住中もアメリカの市民権を捨てない者が多く、定着者の大半はやはり正統派的環境で育った者だといわれる。政教一致的体制、使用言語(現代ヘブライ語)、気質の異なるセファルディ(アジア、アフリカ系)、サブラ(イスラエル生まれ)の増加、現代の新生国家しかも非常事態下で官僚化の進む社会など、イスラエル自体の要因もいろいろあるようだが、American Jewry もそれなりの事情を抱えているといえる。政治・経済的援助さらに精神的連帯は惜しまないものの、イスラエルの支持とその基盤となったシオニズムへの理解は必ずしも一致せず、とりわけ烈しいポグロムはもとより、反ユダヤ主義を身近かに体験していないアメリカのユダヤ系の2、3世は、複雑なヨーロッパの文化的あるいはイデオロギー上の背景を捉えられないことがある。もともとアメリカのシオニズムもその根源は東欧のゲットーにあり、社会主義などとともに移民がロウアー・イースト・サイドに持ち込んだ世俗的教義の一つではあったが、移民数はパレスチナをはるかにはるかにうわまわり(現在でも倍近い約600万)、建国の

時点でも、たとえ1世にせよ少なくとも四半世紀の歳月を経て、それなりのアメリカ化を受けていた。当初アメリカは一時の停車駅と思っていても、いつのまにか根をおろしてしまっていたのだ。彼らにとってはアメリカが現代のシオンそのものだった。かつて同化主義者と社会主義者からはそれぞれの理由で反対されたが、いまなお人間の力（政治行動）に頼るのは神への冒瀆であるとし、メシアによる救済を墨守する真正正統派の小グループはシオニズムとイスラエルの存在を認めていない。そこでシオニズム志向の在米ユダヤ人はジレンマに立たされる。移住せぬ罪悪感から絶望的反米主義になってわれとわが身への非難を口にしたり、むりやり反ユダヤ主義の復興を信じ自分の存在理由をつくりあげたりする。長年の夢が叶いながらなおさめられない（さめるのがこわい？）喜悲劇のようなところがある。いや、下手をすると現代国家イスラエルへの幻滅さえ招きかねない、当のベングリオンのほうは国家成立とともにシオニスト活動家をやめているのだから。ともかく大多数にとってイスラエルは感傷的、望郷的对象で、アメリカへの愛国心と対立するものではなく、現代日用語としてのヘブライ語の流行やイスラエルへの旅行熱ぐらいのところではしかないらしい。若い世代にいたってはイスラエルに感情的連帯も持っていないように思えるが、それでも「六日戦争」（第3次中東戦争—1967）には従軍志願が殺到したという。一旦緩急ともなればやはり無意識の血のなせる業なのか、前出のレバノン侵攻問題にしても支持者は圧倒的に多いという身びいきぶりなのだ。しかし、いずれにせよイスラエルの存在は、なにかにつけアメリカのユダヤ人にとってその identity の根を触発する電磁波のようなもので、建国の理念、そこへの帰属感などの点で文学にも重い複層的なテーマを提供することになった。

### (3) 内的触発——負のアイデンティティ

ホロコーストならびにイスラエル誕生はいわば外側からの触発であり、ユダヤ人として生きるとはどういうことかを問い直されたといってよいだろう。たしかにそれは激しいもので、いまでもナチス復興の動きやイスラエルの動向にたいし敏感にその反応があらわれるところだが、この触発を受けるユダヤ系の生存の根は一方でアメリカの現実深くかかわっていたことも否めない。Judaism の世俗化、つまりアメリカ化のもたらす問題で、移民以来その進行の過程で、自らのユダヤ性をたえず負の形を通して内側から触発されてきたといってよい。それは、内奥のトゲの疼き、血の騒ぎとくらべると日常生活につきまとうしろめたさのようなものである。ここではその諸相をアメリカの戦後社会の趨勢とあわせてみることにする。

国家権力の動員による独占資本主義機構の再建をめざしたニューディールも、ユダ

ヤ系が先鞭をつけた各種の社会保障制度を盛り込みつつも失業の完全な克服にいたらず、30年代後半には曲り角にきていたが、そこへ大戦への参加で軍需産業の生産が一躍伸び完全雇用を達成する。戦後も引続き東西緊張、朝鮮戦争（1950～53）などからくる防衛費、海外援助費の増大でインフレは進んだものの心配された不況はおこらず、アメリカ経済は繁栄の基調を保った。この好条件のなかでユダヤ系も戦後の社会・経済的地位の大幅な向上を成し遂げた。第1世代にとっては小ビジネスか町工場の労働だったものが、2世にあっては技術とビジネスの結合で独立しておこなえる専門職がふえ（医学、法律、会計などの分野が多い）、他人種に比して向上の度合いが早かった。これは旧世界の Shtetle（ユダヤ人の居住した田舎町）時代からの伝統である教育熱心も手伝い、その教育レベルの高さ（高等教育90%前後）によるものだ。そしてゆとりのできた彼らの生活の場もロウアー・イースト・サイドのような American ghetto を脱し（Bronx や Brooklyn などの中間媒体地もあったが）、大都市郊外へと移っていく。すでに20年代に中産階級のため郊外住宅地開発は始められていたが、大恐慌と大戦によって中断され、いまそれが都心部の機能悪化とともに消費・文化生活を充足させる郊外化現象として再開されていた。ユダヤ系も異教徒にまじりその地元の共同体の問題と取り組み、都心での経験があるだけに文化施設の再現に熱を入れたりした。もっとも郊外に出ても外の世界に完全に入りきっているわけではなく、反ユダヤ感情も払拭されていない事情もあって、新しい世代も意外に分散せずお互いに集まる傾向があり “Golden Ghetto” などと皮肉られてもいる。いずれにせよ公教育の場、社会的地位のある職業、密集地をはなれた異教徒のなかの生活を手にしめざましい進歩といえるが、これは反面、宗教・人種のグループを呑み込むアメリカの大きさからいって危険な要素でもある。戦後中産階級の拡大あるいは生活様式の画一化が進むことでその恐れはいっそう強まる。人口構成上も、高等教育と中流化による晩婚、出生率の低下がホロコースト後の移民の減少とあいまって（ソ連を除き東欧にかつてのようなユダヤ人世界はなくなった）アメリカにおけるユダヤ系の人口比は下降線を迎える（1937年：3.7%→1973年：2.9%）。外国生まれは15%に過ぎず、しかも総数590万（1973）の約80%が東北と極西部の拡散著しい大都市周辺に住む。ホロコーストを逃れてきた戦前（15万余）、戦後（50年代まで19万余）の移民、亡命者も前者は学術研究、文化面でアメリカの水準アップに貢献し、後者は伝統的信仰面でその復活を促すグループ（超真正正統派約12,000人、ニューヨークのウィリアムズバーグ地区へ）を含んでいたが、新しい血を注入するほど大勢に影響はなかった。

埋没の恐れは生き方に直截な影響の出る異教徒間結婚でますます大きくなる。この

種の結婚は3世などユダヤ人たることを恥じない世代に多いといわれるが、その増加はアメリカ社会におけるユダヤ系の状況を物語ってもおり、彼らが結婚相手として受け入れられるところまでアメリカ化と世俗化が進んだ証左とされる。その機会に親の束縛をはなれる一般の大学在学中にもっとも多く、他に新しい居住条件や多様な職場もそのチャンスを提供しよう。動機としては、やはり自己嫌悪のせい（ユダヤ人を逃れるため）とか、打算（社会的地位向上をねらう）、ノイローゼ（うるさい親への反抗）などがあげられるがいずれも決定的なものではないようだ。問題は教義との関係で、保守派、正統派では結婚の立会いをせず、相手の改宗も強いてすすめないといわれる。男がユダヤ人である場合が多く、妻を改宗させるにしても、その改宗が不適当だとユダヤ人の子供を産めないことになり難しいことも出てくる。逆に夫が相手の宗教へかわるケースもあるだろうから、ともかく文化・宗教内容の希釈化をもたらす恐れのある intermarriage はユダヤ共同体存続にとっては重大な脅威となる。当人たちの心理の屈折、親族の当惑もかなりのもので、さらに子供の identity の問題が生ずる。ユダヤ人のつもりで育てられる場合でも形式的、宗教的なものは除かれるというが、一般に母親の信仰につくために4分の3が非ユダヤになるという説もある。かつてこの家庭こそ Judaism の道義心の基礎であり、ユダヤ人らしさを植えつける場であった。家庭の団結を強化し異教徒の世界から自らを護るねらいもある。子供は親の延長であり、心配のあまり過保護になり易い。特に母親の息子にたいするそれはパターン化され、子供の側の心理的圧迫や情緒障害によるコンプレックスの形で小説などによくとりあげられる。しかし、この堅固な絆も60年代の風潮のなかでゆるんでくる。1世がほぼその役目を終え、2世に続いて3世も育ってくるこの時期には、世代間の差もある程度定式化できるようになり、1世は刻苦勉励して子供に備えたが、2世代目はそれを利用して、社会的に成功すると子にすべてをあたえたとともに自らも成金趣味に溺れる。その "American dream" の体現者たる両親の世代を批判するのが3世であって、親の悪趣味にはうんざりしている。この図式も作品の格好の題材とされるものだ。

ユダヤ共同体の特性の中核ともいえるべき宗教生活も、ゲッターの壁を出ることによって、また世代交代を通して希薄なものとなっていく。小・中都市や大都市圏の郊外では異教徒たちの宗教活動との均合い上会堂加入率は高く、会堂数もふえているが、比重は社交を兼ねた社会活動にあり、それも年輩の女性に負っているといわれる。割礼、結婚、葬儀といった主要な儀礼は守っても、日常の礼拝、食品戒律（大体10%が守る）などは所属宗派、世代、階層などによってまちまちだし、教育ある者（特に若



年層)は儀式の偏重や形骸化の偽善からはなれ、東洋の宗教へ走ったり文化的領域へいってしまい、いわゆる伝統的宗教心の欠如はおおうべくもない。これも P. Roth や B. J. Friedman などが好んで戯画化するユダヤ生活の一面である。また、作家たちを含めた知識階層のユダヤ教、ユダヤ共同体ばなれも強い。共同体側はそれを例によって自己嫌悪からのものとして非難する(負の identity を衝くことによる内的触発の一形態であろう)が、知識人は自分の真の姿とほど遠い姿を押しつけられるのを嫌い、ユダヤ人であるのは二の次にしてより広い世界のなかでものを考え書こうとする。ただ彼らの場合、消しがたいユダヤ人的特性がつきまとうのも否定できず、その内奥の無意識的な帰属感の揺れや、あるいはホロコーストの悪夢に触発されたユダヤ人的感性の漂わず疎外感や被害者意識が、現代大衆社会の捉えどころのない状況に共鳴してくる。元来不安な環境に生きてきたためゆううつ症になり易いともいわれるユダヤ人のあいだでは知性尊重主義も手伝い、現代の代用宗教である精神分析の人氣も高く、小説に分析医の登場する場面が多いのもそのあらわれだろう。一方これと趣きを異にする現象もあって、戦前ナチスを避けてやってきたイディッシュ作家 I. B. Singer (1978年度ノーベル文学賞受賞)の超自然的な神秘物語が50年代に入るとぼつぼつ英訳され、特に60年代以降人氣を呼ぶが、これは戦後 M. Buber の著作のもたらしたハシディズムへの関心から物質主義、合理主義、非神秘哲学にたいする反動として神の探究の一つの試みともいえる。

各派の経営する Jewish school もふえて、それなりに維持され、普通教科もとり入れられているが、ラビ志望でもない限り高等教育は一般の大学でということになり、60年代以降ではユダヤ系学生も麻薬常用に陥ち入り、アル中さえ少なかった移民世代とは伝統的考え方の相違が著しい。親の世代もブルジョア化で富のもたらすゆがんだ価値観に心を惑わされ、ユダヤ人同士の絆を弱めるだけでなく、体制内からも批判を受けるほどだ。始めから脱宗教だった社会・労働運動も世俗化、アメリカ化を促進したものの一つだ。ただ教義や宗教的習慣への関心は薄れたにせよ、社交的、経済的要素の濃いユダヤ共同体、団体は全国、地方を通じてかなり多く、社交、文化、スポーツ、募金活動といった世俗的面でのユダヤ系の結束をはかっている。中流階級を対象にした最大組織ブネイ・ブリス、女性のシオニスト組織として登場したハダサ、上流向けには一流雑誌「Commentary」(1945年刊)を出してユダヤ系文学に活躍の場をあたえてもいるユダヤ人委員会(発足は西欧系)、好戦的政治活動組織のユダヤ人会議(東欧系)、YMCA のユダヤ版 YMHA (ユダヤ人共同センター運動の前身)などが代表的である。60年代に ethnic identity の再発見の風潮のなかでユダヤブームもお

こったが、これは郊外に出た親たちが、子供の巣立ったあと自分たちの幼年時代を思い、ノスタルジアから当時まだユダヤ的雰囲気に含まれていた生活への関心を深めたことにもよる。

ひるがえって考えてみると、J. Yaffe もいっているように、Judaism は Diaspora (離散) のなかにあって民族保持の上で重要な役割をはたした。その限りで孤立主義や排他主義も必要だったかもしれないが、いまやアメリカにはゲットーもシュテットルもなく、その世界はユダヤ系に開かれている。希釈化や変貌はとどめようもなく、Judaism を絆に同化の浸蝕を防ぐわけにもいかない。自衛は自閉となり却って破滅を招きかねない。これまでユダヤ人は長年の受難と迫害で理想主義と強健な実用主義が組み合わさった倫理的伝統を生み出したといわれる。虐げられた人々への義務感ないし倫理的命令であるゼダカの精神、自己批判や自己期待の強さ、墮落への恐れ、そのような倫理的価値観にユダヤ人としての特性は残っていくのではないか。トーラとタルムードの最後に残った道徳、正義、倫理に関わる部分は人間の生きる上で普遍的内容でもあり、ユダヤ系アメリカ文学もだんだんこのような普遍的立場に立つことも（といっても具体的にはさまざまなユダヤ的においを持つだろうが）考えられ、事実この時期にそのような傾向の作品も見受けられるのである。

戦後東西陣営の対立で一方のリーダーであるアメリカは国際的には緊張を生み出し、その反映で国内的にも50年代初めにマッカーシズムのような集団ヒステリー状況を招いたが、一面かつてない繁栄のなかでむしろこの時期は自己満足的、平穏なムードのうちに推移した。ただ社会の様相は一段とその変貌のテンポを速め、部門別就業人口比で農業面が激減したのに伴い郊外を含めた都市化が進み、より高度な消費・文化生活を現出させた。これには戦争を媒介にした技術革新が絡み、さらにそれは高等教育の需要を促した。好況による中産階級の拡大で生活意識の画一化がみられ、政府、企業、組合などの組織の巨大化の下個人の抑圧がおこる。このなかでユダヤ系は、教育でも都会の中産階級化でも文化的、行動的同化を十分に成し遂げ、アメリカ社会の光景の一部、そのきわめて代表的なタイプともなったのである。これは文学においても以上のようなこの期の諸相を、さらにこれからのアメリカの現実を捉え得る素地をつくったということになろう。もちろんホロコーストのように identity に衝撃をあたえる特異な要因もあるが、反ユダヤ主義などはよりひろい人間存在的な状況に引き直されて出ることが多く、却ってそれゆえ特殊から普遍への文学的效果を印象づける。こうしてアメリカが黒人の公民権運動を皮切りとする人種パワーの奔出、前衛

的意識改革、ヴェトナム反戦運動の60年代の嵐に向かうのと併行して、そのエネルギーを受けるようにユダヤ系文学の隆盛を招来することになるのである。

## (B)

### (1) ホロコーストと反ユダヤ主義の悪夢

ホロコーストの問題はたんにナチスによるユダヤ人絶滅の弾劾にとどまらず、冒頭にも述べたように全人類にたいするもので、げんにユダヤ人以外の犠牲者（ジプシーやキリスト教徒など）も多数出たことを思えば当然だろう。それはひろく人間存在のあり方を根底から問うものであり、倫理的条理を超えた世界をどう考えるかだが、文学としては Lawrence L. Langer のいうように<sup>1)</sup>、その次元を異にする世界、言語に絶するないしは言葉の外側にある暴虐の恐怖の体験をいかに表わすかであって、「……現実がしばしば想像力を凌駕してしまい、芸術家は記録しようとする経験にふさわしいイメージを喚起できなくなってしまった……<sup>2)</sup>」とされるなかで、さまざまな語法、文体上の工夫が探究されてきた（原爆体験の場合もこれに通じるものがあるだろう）。このようにホロコーストの文学は、それ自体現代文学においてテーマ、技法ともども特異な領域を占めるものだが、本稿の性格から以上のような前提をおいた上でアメリカのユダヤ系文学に話を限ることとする。日記、記録類はもとより、創作作品の発表も当然のことながらユダヤ系を中心として、ヨーロッパが早いしまた多い（E. Wiesel, T. Borowski などが代表的、前者については後出）わけだが、これにひきかえアメリカの場合は、直接体験を基にすれば生存者の戦後の移民と言語習得の問題があり、間接的（ヨーロッパとは経験上の差でこちらが多い）にしても、強制収容所の世界を知るのに追体験不能といわれるだけ時間が必要となる。事実、その小説舞台がアメリカの現実のなかに設定され、主人公に悲惨な過去を背負った人物を据える作品はこの時期には殆どみあたらず、60年代それも後半から70年代にかけてである。この過程には先にあげた創作上の困難な問題のほか、アイヒマン裁判（1961）によるホロコースト意識の触発、第3次（1967）、第4次（1973）とひき続くイスラエルの生存を賭けた闘い、ヴェトナム反戦との関連、さらに ethnic interest の高まる風潮のなかでのユダヤ系移民の過去への関心復活などが背景となってくる。しかもその移民は Dorothy S. Bilik によれば “immigrant-survivor”（戦後の生き残りの移民）であって、「Remnants of a vanished European Jewish culture, the immigrant-survivors in America bridge the historical and psychological distance

between the modern Jewish American writer and the somber events that the writer confronts through the fictive imagination.<sup>3)</sup>」というように触媒の役割をはたすことになる。

ここでは時期はややずれるが、この種の小説で最もはやいものといわれる Edward L. Wallant (1926~1962) の *The Pawnbroker* (1962) をとりあげてみる。主人公の Sol Nazerman (〈Nazarene+Naziman〉) は中年で、もとポーランドの大学教師だったが、妻子を強制収容所で殺され、いまはハーレムで質屋をやって寄生的な妹一家を養いながら郊外の高級住宅地に一緒に住んでいる。生体実験や彫り込まれた囚人番号による傷痕が残り、視力も弱く、夜は悪夢に眠りを妨げられる。家族の絶滅の日が8月にめぐってくるたびに古傷がいたむ思いがする。だがしかし、「He did not grieve or mourn them, because he had been cauterized of all abstract things. Reality consisted of the world within one's sight and smell and hearing. He commemorated nothing; it was the secret of his survival<sup>4)</sup>」まさに思考の停止と情感の麻痺で、周囲への無関心、孤立に向かう。言葉遣いは別として、前歴にもかかわらず全般的に思索的叙述に乏しいのも一つはこのためだろう。店でのマフィアへの協力に自ら目をつぶり、ハーレムの窮状にも心を動かさず、家では一室に閉じこもり、わずかな慰めであるチェーホフにすら、遺蹟を調べる冷静な考古学者のようにのめり込もうとせずときたま微笑をもらすのみだ。彼が生活費を出してやっているおなじ収容所の体験を持つ寡婦と寝ては、そのみずばらしいアパートで束の間の憩いを得るが、なんの愛情もあるわけではなく、お互いの絶望と苦悩のなかで結び合わされているだけである。やがてそんな彼に転機がおとずれる。自分の使っている店員の black-Latino, Jesus Ortiz (カトリック教徒) に仲間と押し入れられ、成り行きから Sol を助けようとした Jesus が死ぬ。むしろ自分の死を願っていた主人公は店員の犠牲死に贖罪の意味を認め、石ころのようだった心が次第に開いていく。自分の家族の死を悼む気持ちも出てきて、寡婦とはともにその病死した父を弔う。妹一家のつまはじき者の息子にたいしても father-savior の役目を引き受けてやろうとするのだ。これはいわば愛への回帰であり、仮死的状況からの再生である。作者は T. Dreiser 流の自然主義手法に依るあまり、夢のなかの体験箇所も記録としての訴えはあるにせよ、Bilik のいう解説的フラッシュバックに終り<sup>5)</sup>、収容所世界の文学的提示には効果が弱い欠点がある。しかし、彼の創作時点では、時間的距離の不足、データの不備などを考慮すべきかもしれない。

このあと、妻をナチスに殺され自らも片目に傷を負いながら銃殺をやっと免れたイ

ンテリの老人を主人公に、ニューヨークの狂躁を挟む S. Bellow の *Mr. Sammler's Planet* (1970) や、おなじく妻を失った（と思っている）男が自分をナチスから匿ってくれたポーランド女を二番目の妻として逃亡生活の記憶につきまとわれながらアメリカに暮らし、やはりナチ体験を持つもう一人の恋人と、生き延びた先妻とのあいだの愛のジレンマにおち込む I. B. Singer の *Enemies, A Love Story* (1972) などが続き、ユダヤ系文学の隆盛のなか、充分な perspective をもって、ホロコースト意識の視点からアメリカ現代社会があざやかに捉えられる。ここでは社会・経済的同化や言語上のそれよりも、ユダヤの伝統的価値につながる立場の提示、維持がみられ、Sol Nazerman にさえ渡米してきて 30 年にもなる妹一家のいかにもアメリカ的郊外生活を一步退って見させているし、主人公の再生の姿もユダヤの伝統を継ぐ人物のそれなのだ。この期の移民はすでに価値規準のつくりあげられた彼らの社会で生活してきており、渡米も自発的要素が少ないという事情や、ホロコーストの衝撃、折からの ethnic identity 重視などがこれら作品の背景になっていよう。

戦後ドイツでの見聞を基に、強制収容所の生存者が人間的尊厳をとり戻し再生する様子を描いた Leo W. Schwarz の *The Redeemer* (1953) のような半ば直接的作品もあるが、作者がアメリカに亡命後英語で書いた特異な体験的作品の一つは、なんといっても Jerzy Kosinski (1933~) による少年の悪夢の彷徨を扱った処女作 *The Painted Bird* (1965) である。目、髪、肌の色でジプシーかユダヤ人だと異端視され迫害される主人公の転々とするナチス占領下の東欧は、暴力と狂気の支配するホロコーストの世界に変わりはない。舞台もアメリカでなく、60年代半ばの作品だがこの項に関係深いので特に触れておきたい。大戦勃発直後、安全を考えて都会から遠い村に疎開させられた六歳の“ぼく”（この小説は一人称で語られる）は、まもなく戦乱のなかで両親との繋りを断たれ、養母にも死なれて、苛酷な自然にとりまかれドイツ軍の恐怖にも捉われる村々を、ときに追われときに逃げ出しあてどなくさまよう。無知と迷信のはびこる村の住民たちは兇暴な衝動に駆られ、この邪悪な（と信じられている）黒い目を持つ少年をドイツ軍との関係でも厄災を呼ぶ存在と考え虐待する。彼はさまざまな仕事にこき使われ、雷雨のなかに鎖でつながれ、猛犬をけしかけられ、わけもわからず殴打され、悪童のリンチにあって氷の下に閉じ込められ、ドイツ軍にも突き出される。少年はまさに、鳥刺しに気晴らしから色を塗りたくられた鳥なのだ。それが仲間の群れに放たれると一瞬混乱がおきる、「The painted bird circled from one end of the flock to the other, vainly trying to convince its kin that it was one of them. But, dazzled by its brilliant colors, they flew around it unconvinced.

The painted bird would be forced farther and farther away as it zealously tried to enter the ranks of the flock. We saw soon afterwards how one bird after another would peel off in a fierce attack. Shortly the many-hued shape lost its place in the sky and dropped to the ground<sup>6)</sup>。」

少年が教育を受けた階級の言葉は村民に理解できず、村民の方言は少年に伝わらない。そして教会での伴僧役を失敗して肥えだめに投げ込まれた主人公はついに声まで失うのである（作品としても会話体を含まない）。この断絶から生まれる効果をランガーは作者の言葉を引用していう、「……作中人物は自由に意思を伝える能力を奪われているから、疎外感が強められる。観察はそこでは沈黙のうちにに行なわれる。参加の手段をもたないためにものいわぬ者は観察しなければならないのである。あるいはこの沈黙は同時に、共同体からの（そしてより大なるものからの）離脱を示す隠喩なのである。……」<sup>7)</sup> その少年の目に「非ダーウィンの<sup>8)</sup>」退化ともいうべき残忍な光景が次々と焼きついていく。嫉妬で逆上した粉屋が作男からスプーンで抉りとった目玉、村の女たちに責め殺される森の女、トーチカの飢えたネズミの大群に落ちた大工、兎飼一家の近親相姦と獣姦、カルムイク人による村の凄惨な略奪と暴行……そしてユダヤ人たちを運ぶ家畜用の貨車が姿をみせ始め、死の収容所の話が伝わってくる。百姓たちはキリスト殺し、祭儀殺人という中世以来のイメージにとりつかれたままユダヤ人への憎悪をあらわにし、天罰だとののしり、貨車から落ちた死体の着装品を奪い合う。瀰漫する反ユダヤ主義の重圧のなかで、少年は黒い髪の人間の運命に暗い思いを抱く。Nazerman の場合と違い、少年にとっては現実そのものが悪夢であり、しかも疎外感のフィルターを通して異常な恐怖が増幅される。作品の一種シュールリアリスティックな感じもこれに起因する。

やがて赤軍による解放で共産主義に接し、理不尽な罰を逃れるため一時熱心だった贖罪の祈りへの関心も薄れ、ロシア語と英雄的狙撃兵への憧憬を強める。解放は少年を孤児院を経て六年振りに両親の手へ帰し声も回復させるが、あまりにも非人間的、暴力的の世界に死と隣り合わせにさせられ、押し潰された蛾のような、嫌悪と憎悪をおこさせる生き物とみられてきた主人公は、列車の通過する線路にねころぶことで濃厚な生命感にひたり、復讐の論理に生きる意味を見出す。ドイツ軍につかまった時もSSの将校のまばゆいばかりに輝く存在を前に、たまらぬ嫉みをおぼえたくらいだ。孤児院の荒んだ生活のなかで、崖へ通ずる鉄道の転轍器を発見しそれにみいりながら彼は思う、「I recalled the trains carrying people to the gas chambers and crematories. The men who had ordered and organized all that probably

enjoyed a similar feeling of complete power over their uncomprehending victims. …… They had the power to decide whether the points of thousands of railroad spurs would be switched to tracks leading to life or to death. To be capable of deciding the fate of many people whom one did not even know was a magnificent sensation. I was not sure whether the pleasure depended only on the knowledge of the power one had, or on its use<sup>9)</sup>。」皮肉なまでのこのような迫害者への憧れは主人公が少年だけに一層悲痛である。愛や理性の価値の涸渇、失われた人間性のイメージは解放によっても回復されない、彼はあきらかに「強制収容所の世界」に浸透された存在なのだ。作者はポーランドに生まれその科学アカデミーに勤めたあと、故国の息苦しい雰囲気から逃れて1957年アメリカに亡命、英語の習得に励み、のちにイエール大学で教鞭をとるほどになった。最近までに数冊の創作が出ている。

このような異常体験を基にする作家としてはその後パリ出身の Raymond Feder-  
man (1928～) がおり、彼は肉親をゲシュタポに連れ去られ、家畜用貨車から逃亡して生き残り、戦後アメリカへ移住した。作品は *Double or Nothing* (1971) をはじめいづれも70年代以降発表されたもので、主人公は共通してホロコーストの生き残りではあるが、その移民の滑稽なアメリカ化が描かれたりして、必ずしも恐怖の体験を前面に押し出していない。しかしその創作方法は断片的で独特な記号化や未来小説と S. F. の手法などをとり入れ、ホロコーストを中心とした現実の捉え方に彼なりの認識を示している。*The Necessity and Impossibility of Being a Jewish Writer*<sup>10)</sup> で、ユダヤ系作家は戦前はむしろ Jewishness をかくすようにしたのが、戦後になるとユダヤ人の受難に倫理的責任をとらねばならぬと感じているとしながら、ホロコーストを語り継ぐのは必要である一方、それを語る言葉がない故不可能とのジレンマを提示する。そして結局この悲劇を理解させるのはテキストの form であると述べているが、前述した Langer の見解にも通じるものであろう。なお、ハンガリー生まれの Elie Wiesel (1928～) も身内を収容所で失い、戦後パリに学んだあとイスラエルにいき、さらにアメリカに渡って1963年には米国民権を取得した。この間イスラエルの諸新聞、アメリカの「Jewish Daily Forward」などに寄稿しているが、主としてそのアウシュヴィッツでの体験を自伝的に証言として物語った *Night* はイディッシュ (1956)、仏語 (1958) に続いて1960年英訳が出された。収容所到着の夜幼児を焼いて燃えさかる炎、苛酷な受難に沈黙する神への不信、撤収中互いに向けあう獣性……。生き延びて「死者の使者」となった主人公には、テロリストとしてイスラエル

へ渡ろうと (*Dawn*; 1961), ニューヨークで交通事故にあおうと (*Day*; 1962), たえず同胞の亡霊がつきまとう。作者の脳裡には、ホロコーストの死のオブセッションが原体験としてあの夜の炎のように消しがたく焼きつけられているのだ。彼の作品はこれら初期の三部作をはじめまずフランスで発表されることが多く、その関心もソ連のユダヤ人に向けられるなどコスモポリタンの傾向が強い。

ホロコーストの影を背負った人物は、これら60年代以降の作品以前に、すでに Bernard Malamud (1914~) の短篇に登場していた。ストーリィの構成上背景のない断片的にとどまる場合もあるが、ときとして人生の重みをかいまみさせる。 *The Lady of the Lake* (1958) の乳房に青味がかって歪んだブッヒェンヴァルトでの番号を残したイザベラは、軽い気持ちで名前を偽りユダヤ人であることをかくした主人公のアメリカ青年に、“I can't marry you. We(=Her family)are Jews. My past is meaningful to me. I treasure what I suffered for”.<sup>11)</sup>” といって彼の結婚への期待を宙に浮かせてしまう。 *The Loan* (1952) では、借金をしにきた夫の旧友を前にパン屋の女房は苦難の身の上を語り出す。父をボルシェヴィキに殺され、夫をチフスで亡した彼女はドイツの兄の家に身を寄せるが、戦争直前兄は妹をアメリカに逃し、自らは妻子ともどもヒトラーの殺人炉で犠牲となる。その話の最中にオーブンのなかのパンは黒こげとなり、あの炭化した死骸と重なり合う。さらに *The German Refugee* (1963) はユダヤ系ドイツ人でベルリンの批評家・ジャーナリストの悲劇を扱う。ナチスを避け非ユダヤ人の妻と別れてアメリカに亡命した彼は、講演にそなえて英語の家庭教師を貧乏学生の“ぼく”に頼む。いよいよ原稿を書く段になって彼はなぜか自信をなくし投げやりになるが、ぼくの励ましでなんとか立ち直り、講演も英語で立派にやりおおせる。その二日後下宿へいってみると彼はガス自殺しており、遺書がぼく宛に残されていた。それには、妻がユダヤ嫌いの母の反対を押し切ってユダヤ教に改宗し、折からナチスのユダヤ人狩りにあってポーランドの片隅の町で銃殺されたらしいとしたためてあったのだ。事実、この頃の亡命者は文化的教養と社会的地位のある者多く、進んでやってきたわけではないので、言葉も含めその境遇の激変で適応に苦労した（たとえば S. Zweig や E. Toller のような自殺者もいる）という。その異邦人の苦悩が“ぼく”の気持ちを通して抑えたタッチながらリアルに伝わってくる作品だ。このほか Malamud は、Jewish をしゃべるカラスのような鳥が、舞い込んだ家の主人 Cohen (これもユダヤ人の典型的な名前だが) に嫌われいじめ抜かれる *Jewbird* (1963) でいわれなき反ユダヤ主義を寓したが、のちに祭儀殺人の史実をモデルとした *The Fixer* (1966) により、anti-Semitism に正面から挑む hero



を創出した。

大恐慌とヒトラーの抬頭してきた時期から戦中にかけて、ユダヤ人を擁護し彼らへの理解と共感を示した作家については、前稿で一部述べておいたように、非ユダヤ系では D. C. Fisher が anti-Semitism 克服をテーマにし、Zionism にも多大の関心を寄せ、T. Dreiser も死の前年（1944）いささか手おくれだったがドイツのユダヤ人にたいする扱いをラジオで非難した。一方ユダヤ系の B. Hect は、病的なユダヤ意識を捨て快楽追求におもむくユダヤ系の主人公の醜惡な姿を描いた立場から一転して Jewishness につき、ユダヤ意識のないアメリカのユダヤ人にその権利と価値を護るよう立ちあがれと呼びかける。さらに、Zionism のスポークスマンとして資金援助や著作による宣伝もおこなった。しかし彼は、消極的で足並みの揃わぬ国内ユダヤ系の対ナチ姿勢、救いの手も及ばず不甲斐なく死んでいった同胞にやり場のない思いを抱く。また、いわゆる東欧系移民の子ではないがおのれのうちの Jewishness に目ざめた女流詩人 Muriel Rukeyser (1913～) は、大戦中ヨーロッパのユダヤ人の苦難に同一化し、あるシンポジウム（1944）で、特に改革派の金と時間を使って助けはするが抗議したりかわり合うことはせぬ事なかれ主義を衝き、赤の弾圧、女性の地位の引き下げ、反知性主義などに向かう議會を激化する反ユダヤ主義とおなじレベルのものだと断じ、自己のユダヤ遺産との関係から次のように述べる、「To me, the value of my Jewish heritage, in life and in writing, is its value as a guarantee. Once one's responsibility as a Jew is really assumed, one is guaranteed, not only against fascism, but against many kinds of temptation to close the spirit.<sup>13)</sup>」戦後 Sartre の *Reflexions sur la question juive* (1947) などが高まったユダヤ人問題は、1941年渡米し実践活動にもたずさわったドイツ生まれのユダヤ系女流政治哲学者 H. Arendt による反ユダヤ主義とナチズムの心理的基礎を解明した *Origins of Totalitarianism* (1951) や、アイヒマン裁判を論じた *Eichmann in Jerusalem* (1963) で、現代の社会や組織の病理にまでつながるものと論議を呼んだ。このようななかで国内の反ユダヤ主義を題材に、ユダヤものの最初のベストセラーとなり映画化もされたのが Laura Z. Hobson (1900～) の *Gentleman's Agreement* (1947) であった。主人公は非ユダヤのジャーナリストで、アメリカの anti-Semitism について連載記事を書くため数カ月ユダヤ人のふりをし、日常生活にいかひろく反ユダヤ感情がゆき渡っているか、一般の善意の人々がそれと気づかずどれだけ根深い偏見を受け入れているかを知って驚く。大方の批評家にその啓蒙的役割を買われ、作者の同情的態度からユダヤ系にも好評だったが、深い社会・倫理的疵の上

皮をたんにひっかいたに過ぎず、きれいごとに関わり終り厳しい現実の差別やナチスの犠牲者の意味がわかっていないとの不満も出された。

Hobson と相前後しておなじく非ユダヤ系の主人公が反ユダヤ主義とかかわる内容の作品に、やはりユダヤ系の劇作家 Arthur Miller (1915～) の唯一の長編小説 *Focus* (1945) がある。主人公 Newman はユダヤ人採用を嫌う会社の人事課長だが、自分自身眼鏡をかけ出してからかねて恐れていたように母からもユダヤ人に似ているといわれ、ついに会社でも副社長の命で印象が良くないと左遷を告げられ結局退社せざるを得なくなる。一方彼の家の近所にユダヤ人のキャンデー・ストアがあり、隣の男はその営業妨害をし、彼にもユダヤ人追い出しの組織へ入れと強請する。二の足を踏みながらも保身を考えた彼は加入を承諾する。地下鉄の駅には「ユダヤ人を殺せ」の落書きがあったり、新聞紙上にユダヤ人の墓石への乱暴の記事が出ていたりして街には反ユダヤの空気が漂い、自分も内心ユダヤ人をなんとなくうさん臭いと思ってはいるのだ。ところが、実際求職にいった会社で自分がユダヤ人ととられ断わられたのをあとになって知りショックを受け、隣人からも疑惑の目でみられているのか、ユダヤ人のところとおなじようにゴミ缶をひっくり返され主人公はだんだん不安になる。やがて非ユダヤ系の女性と結婚し、一緒に旅行にいった先のホテルで満員を口実に断わられる。今度は妻がユダヤ系と疑われたようで、彼女はことをはっきりさせるべきだと主張するが、Newman はそれでは懇願めいて却っておかしくなるとためらう。家へ帰ってくるとキャンデー・ストアの窓ガラスがこわされ事態は切迫している様子、妻は反ユダヤ組織の会合に出て隣人の心証をよくするよう強くすすめる。やっと出かけた会合で彼は賛同の拍手をしそびれ、それを見咎められてユダヤくさいと放り出される。帰途ユダヤ人店主と出会い、彼から自分の抱えているユダヤ人のイメージがすべて虚妄であり、特定の観念によるものだと言論される。以後主人公は隣人にはきっぱりした態度で臨み、ユダヤ人にも自主的に立ち退くことや警察への通報を忠告してみるが相手はひるまない。ついに数名の暴漢が彼と店を襲う、ともに闘って彼らを追い払い、ユダヤ人の怪我の手当をしてやったあと、彼はいままでにない心の落ち着きをおぼえるのだ。ここで Hobson の主人公と違うのは意に反してユダヤ人にされるどころだが、これは加害者側からいつ被害者にまわらぬとも限らぬことの暗示であろうし（ポイントになる眼鏡の使い方はアレゴリーとしてはともかく、必然性は弱い）、その他次第に追われていく者の心理が、反ユダヤ主義の雰囲気の中で具体的に出来事と照応していくのはいかにも作者らしい巧みな描出といえよう。偽装の主人公の設定は屈折を生み、多面的扱いができる利点はあるものの、不自然さとトーン

の散漫さを招く、本作品でもそれは否定できないようだが、「社会はイメージを作り出す機械であり、現代人が身につけている仮面と偽りの価値とを与える神話と偏見の供給者である<sup>13)</sup>」という Miller 初期の劇に通ずる前提はここでもうかがえ、まさに identity の真偽をめぐるテーマを扱っている。眼鏡を通して世間はその焦点 (focus) に主人公の虚像をみ、逆に彼はユダヤ人でないだけに一層世間の偏見の実像をみせつけられたといえるだろう。店主の反駁で「神話と偏見」を打破された主人公は最後に、「……he longed deeply for a swift charge of lightning that would with a fiery stroke break away the categories of people and change them so that it would not be important to them what tribe they sprang from.<sup>14)</sup>」とねがい、警官の質問に自分もユダヤ人たることを認め、それまで担ってきた重荷をおろした気になるのである。Miller はこのあと魔女狩りに取材した *The Crucible* (1953) を地でいくように、自らも anti-Americanism の渦中にもまれたが、強制労働に服したドイツ女性との出会いを含む自叙伝的 *After the Fall* (1964)、ナチスのユダヤ人狩りのなかで被害者への連帯を説く *Incident at Vichy* (1964)、最近ではアウシュヴィッツの手記を映画台本化した *Playing for Time* (1980) などこの方面への関心を強めている。

Irwin Shaw (1913~1984) と Norman Mailer (1923~) はともに従軍経験を持つユダヤ系作家で、たまたま同年の1948年にそれぞれ戦争小説 *The Young Lions* と *The Naked and the Dead* を発表し、戦争や組織としての軍隊の非人間性を暴き反響を呼んだが、彼らはそのなかで軍隊にも巢食う anti-Semitism をとりあげている。特殊とはいえ軍隊も人間集団の一形態である以上、一般社会の延長あるいは縮図の面を持つわけで、この風潮も当然の現象であろう。前者では偏見を抱く上官や同僚のいる中隊に二人のユダヤ系兵士が配属される。偏見は模範的行為か勇気によってときとして克服されるが、年上の兵にとってはなによりも聞き流す耳が最大の武器であり、一般社会でとおなじく勇気より思慮分別こそ生き残る上での鍵なのだ。しかし年下の兵 Noah は周囲の侮蔑の目に反撓し、ユダヤ人の名誉のためあくまでも闘い抜く。ヨーロッパ戦線では臆病な上官を尻目に、彼はよりよい未来を思い描いて勇敢に戦死を遂げる。作者はヒューマニズムの立場から戦争批判、ファシズム反対とともに人種差別の非を鳴らしている。後者も二人のユダヤ人兵士を登場させるが、一人の兵士は仲間から罵倒されても、非ユダヤ人の世界の野蛮さを運命として受け入れ、神を信じ、ユダヤ人への同胞意識から孤独を味わわないで済む。もう一人の大学出の兵士は Jewishness の重荷を背負わされ、被差別意識にさいなまれる。自分の責任で

ない出生や、信じてもない宗教、存在しない民族の故に周囲からさげすまれ、アメリカ人としてでなくユダヤ人として見られることに激昂する。だがそのなかで最後に、ユダヤ人の自分が嘲笑的になるのは、そういう的が必要とされるからだと悟る。扱い方にニュアンスの違いはあるものの、両作家ともその出自的背景をうかがわせるに足る作品だ。しかしこれが中心テーマとはなっていない。特に Mailer は世界観の相克やタイム・マシーンによる各自の社会的背景の導入など、すでに軍隊の枠を超えて現代アメリカ社会への多面的で旺盛な関心をみせ、以後マッカーシズムの風圧のなかで一種の思想小説 *Barbary Shore* (1951)、次いで Hollywood を舞台としたアメリカ文明批判の *The Deer Park* (1955) を経て、画一化社会へ反抗する視点から体験的手法などによる創作活動をおこない、ユダヤ的素材は顕在化していない。一方 Shaw にもその後マッカーシズムの赤狩り問題に関連した *The Troubled Air* (1951) があるが、彼はむしろニューヨーカー派の一人として都会ものや戦争ものなど多くの短篇を発表しており、ユダヤ人意識は底流となつてときに表出する形をとる。

戦後アメリカでいかに反ユダヤ主義が退潮し、差別も改善されたとはいえ、50年代迄はいわゆる WASP を中心とする社会での対ユダヤ人意識には潜在的に抜きがたいものがあつた。ユダヤ系の一人として厳しい生活体験を負う Saul Bellow (1915～) も初期作品において、反ユダヤ団体の虐殺の悪夢に悩まされる *Dangling Man* (1944) の Joseph や、キリスト殺しの罵声を浴びせられる Augie 少年 (*The Adventure of Augie March*—1953) ではわずかに苦い背景をにじませたけれど、anti-Semitism をめぐる設定のなかでユダヤ意識やユダヤ人問題を全面に出し、主人公にその弁護、反駁をおこなわせたのが *The Victim* (1947) である。ユダヤ系の主人公 Leventhal は身におぼえないのに、かつての知人でニューイングランドの名門の血をひく失業者（反ユダヤ主義者に多いとされるタイプの一つ）にしつこくつきまといわれる。どうやらあるパーティの席上、その男が主人公の親友に反ユダヤ的なことをいったのを根にもった Leventhal が、男の紹介してくれたその勤め先のボスと喧嘩をしたため、とばっちりをくって自分が犠牲になったのだという。以後まともな職につけず、妻も自動車事故で死んだ、これはみなおまえが復讐的に仕組んだことなのだから責任があると難詰されるのだ。主人公には復讐など思いもよらぬことで、それはむしろその男の怠け根性、無気力、酒飲みのせいだとつっぱね、相手のユダヤ人についての偏見にたいしては、アングロサクソンの公正さをただし、あるいは名門層の貴族意識を衝き、ユダヤ人の用心深さへの論難には何百万ものユダヤ人虐殺をもって応ずる。だがその彼も、病気の幼い甥に好意で専門医を世話してやったのに死なれ、甥の

身内なかでもカトリック信者の祖母から、自分が忌み嫌われる存在としてのユダヤ人なのだとたえず意識させられるのである。たしかにこの作品には、潜在的な反ユダヤ感情の汪溢する社会で自らのユダヤ意識にこだわる自虐的告白めいたものが感じられるが、同化と疎外のあいだに *indentity* を引き裂かれるこれまでのユダヤ人像を踏襲するものではない<sup>15)</sup>。むしろ加害者たる反ユダヤの WASP を時代遅れの偏見を持った落伍者とするだけでなく、被害者の立場に立たせ *ethnic identity* の高揚へと向かう時代背景を反映させてもいる。宿命的な子供の死や相手の男のいわれのない責任追求に戸惑い反撥しながらも、主人公は徐々にやましさを感じ、おのれの保身的生き方を反省させられ、ついに男には宿を提供し職探しまでしてやり、生活上の同一化もおこる。この不合理な非難に捉われる主人公には、複雑化した現代社会機構のなかで、いつどこで加害と被害の関係が生じ、さらにその関係が逆転するかわからないという不安な姿が描かれているし、相対するもののアンビヴァレントな内面を扱っている。必ずしも明瞭ではないが、Bellow は窮地におち入った主人公を人間として尊厳を選択して生きる方向で救おうとしており、全体的に作者の身についてユダヤ人意識、態度によりながらもより普遍的な現代の命題へ向かっているといつてよい。おなじく反ユダヤ主義を題材にした Bruce J. Friedman (1930~) の *Stern* (1962) になると、60年代の特徴の一つ *black humor* の要素が強く、郊外生活の *anti-Semism* のなかで主人公は自分にとり憑いている “*kike-man*” (=ユダヤ人意識) に悩まされるあまり胃潰瘍からついに神経衰弱におち入る。作者の目はあくまで冷静にコミカルな人物やグロテスクな情景を通してユダヤ意識にさいなまれるユダヤ人を分析し、現代アメリカ社会におけるユダヤ性を追求するが、これは一歩ずらせば誇大な被害者意識という一般的なテーマにもつながる可能性がある。

## (2) イスラエルと Jewish identity

ユダヤ人の存立にとって、ホロコーストがその強烈な否定を通しての問いかけだったとすれば、大戦後三年にしてなったイスラエル建国はまさに回天ともいうべき全面的肯定によるその発揚であった。折からニュルンベルク裁判 (1946) や映像などの諸記録で明らかにされつつあったナチスの暴虐とアラブの一斉侵攻が、すくなくともユダヤ人にとっては、ユダヤ的なものへの関心を高めさせることになった。シオニズムの大義・理念の見直し、歴史的遺産の再評価、仲間との連帯の確認などで消えかかった *identity* は誇りと自信をもってとり戻される。

イスラエルの使命については、前回 *Jewishness* 肯定の項で触れた W. Frank の

*Bridgehead: The Drama of Israel* (1957) のように<sup>16)</sup>、ユダヤ人の生き残る最終目標としてのメシア主義を強調、倫理的原則の具体化をうたい、イスラエルは正義、慈悲、愛を通しての世界救済の橋頭堡たらねばならないという。またおなじく前出の、バルフォア宣言からイスラエル建国までシオニズムのため献身した M. Samuel も<sup>17)</sup>、*Level Sunlight* (1953) でイスラエル再生のメシア的面を重視して、物理的国家をつくるだけでなく全ユダヤ人の再建を手伝う使命を持つものとし、moral regeneration を全面に出している。彼はさらに、ユダヤ系アメリカ人もたんに資金の提供者たるにとどまらず、イスラエルで打ちたてられる moral form of life のメッセージを欧米にもたらすようすべきだと主張した。いずれもメシア性と倫理性を、ユダヤ人のみでなく世界にたいするイスラエルの使命の backbone としているのにかわりはない。Michael Blankfort はユダヤ人たることの誇り、その identity の受容を *The Juggler* (1952) で扱い、*Behold the Fire* (1965) では第1次大戦で対トルコ解放軍に身を投じ母国建設の礎石となったユダヤ人たちの栄誉を伝えた。通俗的で宣伝的要素もあるが、一時流行を呼んだ *Exodus* (1958) で、Leon Uris (1924~) は中東戦争で闘うユダヤ人の従来とまったく違ったイメージを反映させ、不屈のユダヤ愛国者たちの伝説的物語を描いてみせた。これは J. Hersey によるワルシャワ・ゲットの蜂起を扱った *The Wall* (1950) などの heroic Jews の描出を受けたといわれるが、このあとさらに R. Nathan の *A Star in the Winter* (1962) のようなイスラエル建国に触発された主人公が自らの Jewish identity を認識するという Jewishness を積極的に肯定する作品が続いた。

一方イスラエルの使命ならびに将来と他国（特にアメリカ）のユダヤ人のあり方を考えたものには、(A)―(2)でみたようにいろいろ錯綜した面がうかがえる。たとえば、ユダヤ系英国作家だが Arthur Koestler (1982年歿) は *Promise and Fulfillment: Palestine 1917~1949* (1949) で、イスラエルのユダヤ人の mentality が他の欧米のユダヤ人のそれと違ってくることを予見し（サブラやセファルディの増加と関連）、しまいにはイスラエルが今日いわれている意味での非ユダヤ国家になってしまうだろうとさえいっている。他方イスラエルへいきたがらず別のところで分離主義をとる者はアナクロであり、いまや wandering Jew の役目は終り Diaspora は消滅したのだから、生活と文化を共有する国民に溶け込み一体となれとすすめる。げんにアメリカの Jewry の衰退の可能性を唱える学者もいないわけではない。これに真向から反対したのは前回でもとりあげた L. Lewisohn で<sup>18)</sup>、彼は *The American Jew* (1950) のなかで真正なユダヤ人はシオニストであり、またあらねばならぬと主張し、

ユダヤ人が民族意識を維持し伝統的ユダヤ教の「掟」であるモーゼの律法を守ってはじめてユダヤ人のアメリカでの存続が可能になるとしている。「Lewisohn はヒトラーのユダヤ人絶滅という破局が同化の議論の誤りであることを立証したと感じたのだ<sup>19)</sup>」小説家として多様な対応をみせ、戦後2番目のシオニズム小説 *My Father's House* (1947) で難民の子のイスラエル帰還を描いた M. Levin (1981年歿) は、その自伝的作品 *In Search* (1950) でイスラエルおよび欧米への自らの関係を問い、Koestler とも Lewisohn とも異なる結論に到達した。すなわち、他国のユダヤ人たちはイスラエルの誕生に熱っぽく反応する一方、自らの同化を論じているが、これは新事態を前にした一時的混乱で、究極的には Jewishness をとるかその重荷を脱するか二者択一に迫られる。彼自身すでにパレスチナでの体験から自己の内の二つの魂に気づき、結局 Americanism も Jewishness もともに捨てられぬのを悟る。その後も従軍記者として強制収容所の惨状やイスラエルの独立闘争を目撃し、1950年頃には biculturalism を自分の生き方として受け入れる。Jewishness は彼にとって宗教的・社会的証というよりユダヤの民への帰属感であった。イスラエルはあたらしい始まりでユダヤ問題の終りではなく、積極的価値を築き非ユダヤ人との健全な関係を打ちたてる土台となるものだ。アメリカのユダヤ人はイスラエルから文化的栄養を吸収し、逆にイスラエルへ cosmopolitanism の counter-balance をあたえ、その国粹化（閉鎖化）を防ぐことができる。ユダヤ人の Messianism がイスラエルを達成したとすれば、人類はよりひろい Messianism を持つべきで、それによって世界平和と正義が成し遂げられるとしている。このようなイスラエルの Jewish community と他のそれとのあいだの文化的相互性ないし相互作用を重視するのは、かつて正統派の指導者で“ユダヤ人センター”の提唱者である Mordecai Menahem Kaplan (1881~?) であり、彼はその *A New Zionism* (1955) において、イスラエルの実現をみた今日シオニズムは、ユダヤ人のためにあるのでその逆ではないから、もっと大きい目的に向かわねばならぬとする。それは現代のメシア運動によりすべてのユダヤ人を包摂し、Diaspora Judaism のための恒久的場を保障すべきだ、さもないとイスラエルのユダヤ人と Diaspora のユダヤ人との疎隔が始まり Jewry の勝利も破局を迎えるだろう。イスラエルの開発にはトーラの創造的拡張とユダヤ人の再構成が伴わねばならないと主張する。

Americanism か Jewishness かの問題といい、イスラエルのユダヤ人と Diaspora のユダヤ人の疎隔といい、これは現代のアメリカにとどまるユダヤ人のジレンマを示してもいよう。先祖の約束の地への憧憬と自由の天地＝もう一つのシオン・アメリカ

への根付きのあいだに裂かれている彼らの立場は微妙だ。イスラエルにたいする強力な支援者でありながらそこへの移住の理由がみつからず、アメリカであたらしい生き方を生み出せると思う。Kaplan の主張もいわゆる文化的多元論の延長であって、Levin のように biculturalism ともなる。つまりアメリカの空間でユダヤの時間という生活である。この二元論は20世紀初頭からみられたもので、文化の多様性はアメリカ自身をも豊かにし変化を持たせると考えられた。"Melting Pot"の考え方は狭いナショナリズムであり、色彩に乏しく没趣味的な同質社会のなかで創造的思考の試みを不毛とする。これは現今の "Salad Bowl" 論にも通じるといえるが、シオニズムが Jewry にとっての trans-nationalism だとすれば、pluralism も trans-national なアメリカにとって望ましいパターンではないか。アメリカへの政治的忠誠とユダヤのセンターたるイスラエルへの文化的忠誠は両立する。だがしかし、たしかにイスラエルの衝撃は同化傾向を鈍らせ、アメリカでユダヤ人たることの意味をますます問うことにはなったが、はたしてこのまま分離主義を続けるだけのユダヤ的価値がどこまであるか、Jewishness の独自性の保持やイスラエルとの緊密な連帯はアメリカで他者の寛容を刺激しはすまいかと思えば、イスラエル・アメリカという複眼的見方のなかで彼らの identity の像の輪郭もあやしくぼけてくる。このあたらしい生き方も恵まれたゲットーでの昔の誤った夢であり、もはや Judaism とはいえない宗教、社交場に過ぎないシナゴーク、孤立をおそれての異教徒間結婚などで、assimilation の波に吞まれていかないとは保障できないのだ。いずれにせよ、今日 Diaspora が半ば強制された祖国喪失でなくなった以上、彼らの行方はイスラエルの明日と微妙にからみ合いながら展開していくのではなからうか。

以上のように、一つは経験上の事情でアメリカのユダヤ系のホロコーストにかかわりのある作品は（体験者のものも含めて）、この期には乏しく、あっても Malamud の場合のように断片的、間接的、ないし比喩的であり、かなりはやい例として Wal-lant の作品で現代アメリカ生活から遊離した主人公の姿勢に 伝統志向的傾向を認めることはできるが、いずれにせよ60年代後半以降に多いこの種のものについては ethnic identity との関連で再検討が必要であろう。むしろ彼らにとって身近かだったのは反ユダヤ主義・感情であり、それを扱ったものにはさまざまな様相がみられる。ただ単に実態を描き、不当性を暴いて反論するにとどまってはキャンペーンとしてはともかく文学的には硬直性を免れず、この点 Hobson や Miller のように偽装的主人公を登場させたものは弱いきらいがある。反ユダヤそのものの否定からはユダ



ヤ人と異教徒は基本的価値において実際に区別はつけがたいことになり、ユダヤ性より人間性の強調へいく。また *The Naked and the Dead* のインテリ兵士のように自らのユダヤ性を打ち消す行き方もあるが、これはすべてのユダヤ人は同じとする異教徒の反ユダヤ主義にあって挫折につながる。さらにあたえられた心理的 trauma をなめる自虐性や反ユダヤ主義との共生関係 (cf. *The Victim*) まで描かれ、(3)の項目ともつながってくる。たしかにホロコースト・ショックやイスラエルによる昂揚から反応はあり、Jewishness への関心は高まった (たとえば Yiddish の一時的復活) もものの、文学上は時間的にあまり近すぎ直截的な要素が強い。それよりむしろこの時期に「……the fact of being a Jew became available to me as a central symbol of alienation, bias, point of view, and certain other characteristics which are the peculiar marks of modern life, and as I think now, the essential ones.<sup>20)</sup>」という表明もあって、すでに60年代へのステップは用意されていたといえよう。

(A): [引用・参考文献]

- Lucy S. Dawidowicz, *The War against the Jews 1933-1945* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1975)
- 八木あき子『5千万人のヒトラーがいた!』(文芸春秋, 1983)
- K. ハート, 吉村英朗訳『アウシュヴィッツの少女』(時事通信社, 1983)
- E. リンゲルブルム, 大島・入谷訳『ワルシャワ・ゲッター』(みすず書房, 1982)
- J. アメリー, 池内紀訳『さまざまな場所』(法政大学出版局, 1983)
- 笹川正博『パレスチナ』(朝日選書18: 朝日新聞社, 1974)
- NHK海外取材班『ユダヤの世界』(日本放送出版協会, 1974)
- 奈良宏志編『ユダヤ人』(現代のエスプリ No. 121: 至文堂, 1977)
- W. ケラー, 迫川・天野訳『ディアスポラ』(山本書店, 1982)
- M. ディモント, 藤本和子訳『ユダヤ人——神と歴史のはざままで』(朝日新聞社, 1977)
- J. ヤフエ, 西尾忠久訳『アメリカのユダヤ人——二重人格者の集団』(日本経済新聞社, 1972)
- Henry L. Feingold, *Zion in America* (New York: Twayne Pub. Inc., 1974)
- 浜野成生『ユダヤ系アメリカ人と日本の世紀』(弓書房, 1981)
- F. アレン, 河村厚訳『アメリカ社会の変貌』(光和堂, 1966)
- H. ジン, 油井大三郎訳『民衆のアメリカ史』[下] (TBS ブリタニカ, 1982)
- 大島良行『素顔のアメリカ』(中央大学出版部, 1981)
- 本間長世編『アメリカ世界 I, II』(有斐閣, 1980)
- 本間長世編『今日のアメリカ』(講座アメリカの文化 6: 南雲堂, 1970)

(B): [注]

- 1) L. ランガー, 増谷他3名訳『ホロコーストの文学』(晶文社, 1982), 序。

- 2) 同上, p. 412.
- 3) D. S. Bilik, *Immigrant-Survivors: Post-Holocaust Consciousness in Recent Jewish American Fiction* (Wesleyan Univ. Press, 1981), p. 5.
- 4) E. L. Wallant, *The Pawnbroker* [C. Angoff & M. Levin, ed., *The Rise of American Jewish Literature* (New York: Simon & Schuster, 1970), p. 763]
- 5) D. S. Bilik, *Immigrant-Survivors*, p. 89.
- 6) J. Kosinski, *The Painted Bird* (1965; rpt. New York: Bantam Books, Inc., 1972), p. 44.
- 7) L. ランガー『ホロコーストの文学』, p. 251 (原典は J. コジンスキー『異彩の鳥についての作家ノート』, 1965)
- 8) 同上, p. 264.
- 9) J. Kosinski, *The Painted Bird*, p. 200.
- 10) 「別冊英語青年」: Jewish-American Literature Special Number (研究社, 1983), pp. 48-53.
- 11) B. Malamud, *The Lady of the Lake* [B. Malamud, *The Magic Barrel* (1958; rpt. New York: Dell Pub. Co., Inc., 1966), p. 118] 引用文中 ( ) は筆者.
- 12) *Under Forty* (symposium) [T. L. Gross, ed., *The Literature of American Jews* (New York: The Free Press, 1973), p. 368]
- 13) A. S. ダウナー編, 大島・横尾訳『アメリカの演劇』(文修堂, 1969), p. 113.
- 14) A. Miller, *Focus* (1945; rpt. New York: Avon, 1965), p. 208.
- 15) A. Guttman は *The Jewish Writer in America* (New York: Oxford Univ. Press, Inc., 1971) で, 「...Leventhal seems finally to have accepted the fact that he is both Jew and American.」(p. 189) といっている。
- 16) 工学院大学「研究論叢」: 第19号, p. 115.
- 17) 同上
- 18) 同上, pp. 113-115.
- 19) A. Guttman, *The Jewish Writer in America*, p. 107.
- 20) D. Schwartz, *Under Forty* (*The Literature of American Jews* p. 363.)

(い나다 たけひこ 本学教授・英語)